

# 琵琶湖沿岸域におけるオオクチバス、ブルーギル当歳魚の発生状況

田口貴史（滋賀県水産試験場）

## 1. はじめに

滋賀県ではオオクチバス、ブルーギルの撲滅を目指した様々な駆除事業が実施されている。滋賀県水産試験場ではこうした事業の効果を把握する目的で、毎年秋に琵琶湖沿岸域でオオクチバス、ブルーギル当歳魚の発生状況を調査しており、本年度についても調査結果が得られたので過去のデータ(平成19年～平成26年)との比較を交えて報告する。

## 2. 方法

平成27年9月16日から11月4日にかけて、琵琶湖沿岸域(水深7m以浅)の116定点(北湖75定点、南湖41定点)で調査を行った。調査は小型ビームトロール網(ビーム長4m)を小型動力船で曳網(底曳網)することで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。

採捕したオオクチバス、ブルーギルの体長組成から、オオクチバスでは標準体長120mm未満を当歳魚、ブルーギルでは標準体長55mm未満を当歳魚とし、その生息密度(曳網面積1haあたりの採捕尾数)を算出した。

## 3. 結果

オオクチバス当歳魚の生息密度は北湖、南湖ともにそれぞれ665.4尾/ha(前年比83.7%)、293.3尾/ha(前年比17.8%)と減少した(図1)。一方、ブルーギル当歳魚の生息密度は北湖では過去最高の1816.4尾/ha(前年比228.1%)であった(図2)。南湖においても過去2番目となる5974.6尾/ha(前年比195.3%)となり、2年連続して増加した。

このことから、ブルーギル当歳魚の発生量は琵琶湖沿岸域で増加傾向にあると考えられ、これらの当歳魚が繁殖に参加する前に沖曳網等の効率的に捕獲できる漁具で集中的に駆除す

ることが重要であると考えられる。また、オオクチバスについても過去に当歳魚生息密度が減少した翌年に再び生息密度が増加する場合があったことから、次年度以降の動向に注意する必要がある。

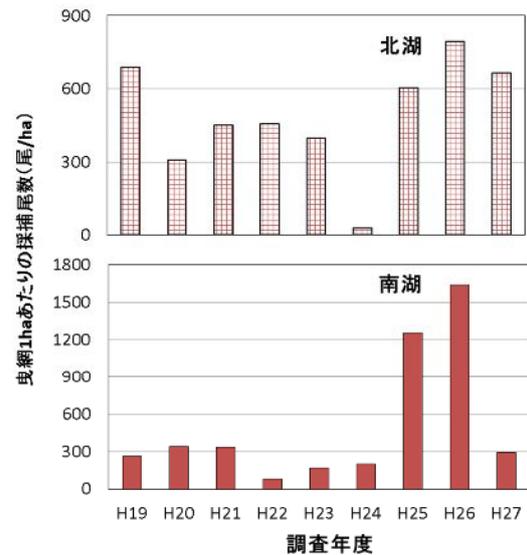


図1. 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化

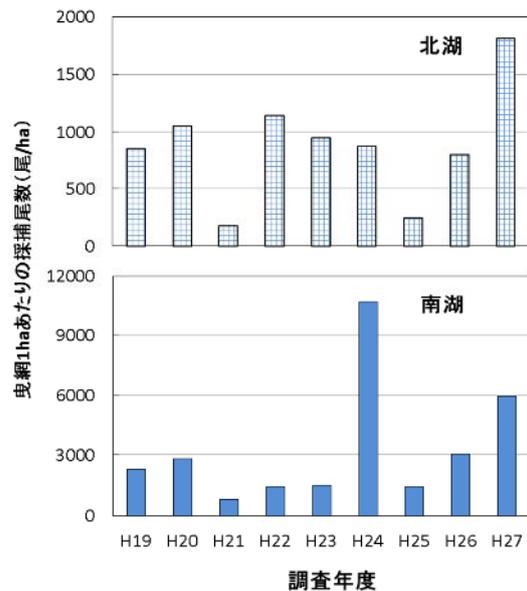


図2. 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化